青山同窓会報

《発行所》
青山同窓会
〒951 新潟市関屋下川原町2-635
新潟県立新潟高等学校内
TEL 025－266－5268
FAX 025－266－5268
《編集、発行人》
上村光司
《印刷所》
オリオン印刷㈱
〒950 新潟市南出来島1-19-1
TEL 025－283－2151
FAX 025－283－3804

ごあいさつ

青山同窓会会長
37回　鈴木正二

平成六年、新しい年をいかがな気持ちでお迎えになりましたか。

昨年はいろいろと変革の年でした。また長引く不況、暮れには回復するだろうとの願いも空しく、いまだ続いております。

ぜひ今年こそよい年であってほしいと切に願っております。経済も早く回復し、お互いに元気な顔で夏の総会に再びたくさんお集まりいただきたいものと思っています。

同窓会も年々会員も増え、出席も増え、ありがたいことです。各期幹事さんの献身的なご努力、ご奉仕、クラス会の開催、総会への勧誘、などいつも感謝しています。老若男女、幅広く、歴史のあるこの青山同窓会が、今後さらに発展することを願っております。

会員各位におかれましても、ご健康で、ますます発展されますようお祈り致しております。

平成五年度 青山同窓会総会

昨年七月十六日夕六時より ホテル新潟にて、恒例の総会が開かれました。赤羽幹事長の司会で進められ、鈴木会長ならびに瀧澤校長の挨拶をいただいた後、議事に入り会務報告、平成四年度決算及びその監査報告、平成五年度予算がそれぞれ提案されましたが、満場一致で承認されました。

次に役員改選について、鈴木会長から提案されましたが、これについても承認されました。詳細は以下の通りです。

故等々力英男前副会長の後任に厚地武氏（51回）、また副幹事長については、筑波龍子氏（52回）の後任に藤井泰介氏（51回）、上杉雅之氏（60回）の後任に小島富美子氏（78回）、監事については、福山健氏（39回）の後任に上杉雅之氏がそれぞれ就任いたしました。

総会は無事終了し、舞台は懇親会へと移って行きました。

東京青山同窓会 平成五年度総会

恒例の東京の総会は十一月十二日（金）サンケイ会館五Fのサンケイホールに於いて午後六時より、百六十名の参加を得て開催されました。

総会は斎藤会長の挨拶、阿尻幹事長の会務報告、小林会計監事の決算、予算、そして石塚事務局長の事業報告と進み、校歌斉唱。

懇親会に入っては、斉藤英四郎名誉会長から挨拶をいただき、つづいて新潟からおいで戴いた来賓の鈴木会長、滝沢校長、長谷川市長に順次ご挨拶を戴き、乾杯し、懇談に移りました。

アトラクションとして、関口智子さんのバイオリン、その後ウルトラジャンケンなどを楽しみ、最後に応援歌を歌い、名残も尽きないままに閉会となりました。

平成五年度 総会懇親会について

実行委員長　69回　敦井栄一

昨年にひき続いて、懇親会の実行委員長の大役を仰せつかりましたが、皆様方からの格別なるご協力によりお蔭様をもちまして成功裡に終了することができました。ここに厚く御礼を申し上げます。

昨年は母校創立百周年の年ということで、懇親会は記念祝賀会と兼ねて行われましたので、学校ならびにPTAの方々と連絡をとり合いながら今回は従来の形に戻った懇親会が行われました。とは言え、私にとって初体験とも言える仕事でした。

実行委員会の組織づくり、

（前頁よりつづく）

事務局やホテル新潟との打合せ、実行委員会を開いて打合せをするなど一歩一歩準備を進めました。特に実行委員会の方々の一方ならぬご協力に感謝いたします。

総会後六時半より、約七百四十名の会員出席による懇親会の幕が切って落されました。鈴木会長の母校百周年に際しての会員からのご協力に対しての謝辞ならびに二百周年に向けての新なるスタートに触れた挨拶を頂だいした後、来賓の東京同窓会長の斉藤伸雄氏から祝辞をいただきました。その後、出席者全員で新旧の校歌を声高らかに斉唱し開宴となりました。（ピアノ伴奏63回江口律子さん、指揮70回大塚哲夫君）

開宴後、新潟の情緒再びということで柳都の振り袖さん方と古町のお姐さん達の踊りが会場に花を添えてくれました。各期のテーブルでは、同窓会特有の旧交を温めながらの和やかな歓談に花を咲かせていました。時間はあっという間に過ぎ、最後に上村副会長の音頭により万才三唱が行われ、来年の総会での再会を約し閉会となりました。

大禍なく終ることが出来、実はほっとしているのが偽らざる気持であります。皆様方のご協力の賜物と感謝しております。任期はもう一年だそうでございますが、来年は更に良い懇親会にしたいと思っておりますので、よろしくご協力の程をお願いいたします。

年頭随想

お米で思うこと

校内幹事 69回　栃倉　浩

◎うどん、そば、素麺、パン、スパゲティ等。そしてお米。こういった主食なるものが日常の食卓を彩ってくれる。日本人は実に器用だと思う。外国のものでも、日本のものでも自分流にアレンジして多彩な食生活を楽しんでいるし、不景気とは言え、テレビ雑誌等が飽くことのないグルメ特集を組んで視聴者や読者を魅きつけている。

◎小学生の頃、遠足当日の朝、母が薪で炊いたばかりのご飯でおにぎりをにぎっている姿をなつかしく思い出す。今のような上質なものではなかったので、海苔は決まって火で焙ってから、にぎったご飯を包む。昼にその大きなにぎり飯をほおばる時の喜びは今でも忘れられない。

◎私の子供の頃は、主食は米。米で育った。育ち盛りの頃はいつも何杯も何杯も飯を口に運んだ。そして母は口ぐせのように、農家の人が汗水流して精魂込めて作ってくれたお米なので一粒たりとも食べ残してはいけないと私を諭した。お米というのは貴重なものなんだなぁと思うようになった。

◎日本の食文化の原点は、米と野菜であろう。台風、冷害、旱ばつ等気候不順な日本にあっては、そういった農作物は、古来自然に頭を垂れて、いただくものであったのだろう。

自然を管理して農作物を作り、特に麦を家畜に食べさせ肉食文化を発展させて来た。

◎昨年の十二月、ついに日本、韓国など米解放に最後まで抵抗したが、保護主義よりも世界的な自由貿易システムを優先させる形で、ガット・ウルグウアイラウンドが妥結した。これにより外国の米が日本の市場にも出回ることになる。

◎そう言えば、数年前、日本はアメリカからの牛肉とオレンジ輸入の自由化にやむを得ず踏切った。時の農水大臣は本校卒業の故佐藤隆氏（五十二回）であった。在任中母校に講演に来られ、「一国の利害と世界的な利害とを協調させることの難しさ」を述べ、交渉で苦渋に満ちた決断をせざるを得なかったことを説明された。ここでも日本の農産物が脅やかされることになった。

◎詳しいことはわからないが、一国のエゴは許されないということなのだろう。グローバルな物の見方、考え方をしなければならないということなのだろう。しかし、石油や鉄等の天然資源に恵まれず、気候が不順、国土の狭い日本が欧米と同じ土俵で生き抜いて行けるかいささか不安である。米が古来日本の主食文化の最たるものだとすれば、他の文化をそうするように、その文化を守ることは当然であるという意見も頷ける。自然と共生して来た日本の風土、日本人の感覚を欧米の人たちにも分かって欲しいと思うのはわがままな考えであろうか。

収穫期の村のお祭りは、それに起因する。

◎一方、欧米の食文化の原点は、麦と肉と言えるであろう。日本とは違って、比較的温順な気候の下、自然に対峙し、

青山42期生同期会報告

42回　高山雄次郎

毎年の事乍ら今年は特に喜寿（七十七才）に当たる年回りと言う事で大いに盛上げるべく夫々声を掛けましたが中々による年波には勝てず、やれ膝が痛いの腰が悪いの体調がどうのと色々故障があり幹事としては頭の痛いところでしたが、それでも参加御協力を頂いたのが十五人で東京方面より東城・丸山・岡田・鳥羽の四氏、地元から有田・今井・岡・大野・神林・小武内・菊地・西山・広沢・豊岡の十氏に小生と十一人。昨年を大きく上回る出席を見る事が出来ました。

今回は東京側の要望もあり岩室温泉一泊で段取り計画等すべて菊地氏が旅館の下見迄して呉れて立案して下さいました。毎度の事乍ら頭が下がります。

十月十八日十三時、駅前マルタケビル前に終結。宿よりの送迎バスにて先ず母校へ参観に伺いました。が、五十八年振りの母校には昔を偲ぶものは何一つ残って居らず、些か淋しい思いを致しました。校長先生は御留守でしたが校長室でお茶の接待を受けたり、色々と気を使って頂いた事、厚く御礼を申し上げ度いと思います。

母校を辞した我々は弥彦神社へ、菊祭りの準備でザワめいて居る中を参拝して宿の松葉屋へ到着。十八時の宴会迄のんびり湯に入ったり昔のニキビ時代に還り、話に花が咲き尽きる事も無く、すっかり往時の想出に浸り、特に此の度は永年故人の扱いを受けて居た岡田龍雄氏が実は健在であり、それに小武内氏が五十三年振りに新潟へユーターンと云う事で御二人が参加されまして、此れ又大いに欣ばしい限りでした。

翌十九日は寺泊へ行く途中、五合庵で良寛の生活を偲び魚のアメ横では何だ、かんだと色々土産を買込み、野積のソーワ美術館は岡氏の案内で隅から隅迄、己の眼の頼り無さにスッカリ驚き、快晴の弥彦山頂での大パノラマに気分を良くし、更に宿で昼食を摂り再会を約し乍ら駅前マルタケビル十三時五十五分散会をした次第です。

同期会は実に良いものです。全員が青春時代に還り心より懐かしみ暖かい友情に包まれて、そこには上下の隔てや利害も打算も無く、純粋に旧交を温め御互いの健康を欣び合い且つ心配し合う、引退組も現役も一つになって同じ想い出を共有する仲間として眞から楽しむ事が出来るのです。だから小生は大好きです。

MUZO会有志「還暦」に祈禱

60回　坂井文夫

われわれ60回生は今年還暦を迎えた。同期生の約一割、二十七名は既に鬼籍に入ってしまったが、定年を迎え新しい仕事で再出発する者が多い。「心機一転だ。」そこで去る十一月七日、三十六名が集まって同期生の曹洞宗法幢寺の住職山崎賢隆君にお願いして消除災厄、諸縁吉祥を祈禱した。ところで中学時代の山崎君は一種の悪党で、同期の汽車通組を時には肉体言語を用いて服属させていた自他共に許すボス。その版図は信越線各駅による通学区域全体に及んでいた。しかし、家では寺の後継者として仏道修行に精進する良い子であったに違いない。あの年頃はわれわれの多くがそうであったが、学校では偽悪的に振る舞うものである。有名な大般若経が読誦されたが、五〇〇万字、六〇〇巻の膨大なこの経典の転読の儀礼の捌きも見事で、立派な大和尚になっておられた。今ではこの地域の同宗約三十カ寺を束ねる教区長も努めておられる。ところでこの中蒲原郡横越村小杉の揚揮山法幢寺は天正十七年に建立され、四百年前から延命酒呑大菩薩が祀られていることで有名である。この地方では流行仏といわれ、地蔵尊に捧げた酒のお下がりは、井戸に注げば水を清め飲めば不老長寿の御利益があるとして、今でも年一度の御開張の際には大勢の礼拝者が訪れる由。祈禱が終わってから曽我忠夫君のお世話で横越村の料亭「本徳」で鮭料理を味わい、斉藤保夫君御提供の海老茶のベレー帽をかぶって写真を撮ったりして興じたが、私は寺で須弥壇にそっと飾られていた清水君の遺影を見てから、どうも亡くなった友人や先生が次々に思い出されてならなかった。皆も同じ思いであったのか宴席ではそちこちで逝った人の思い出が話題になっていたようである。「山崎君のときは内山君が最期までよく見舞った…」「市岡君は自転車に乗っていたときに突然、だってね…」私は祈った、そして思った。「居ない、でも何時も一緒に居るのだ」と。

二十五周年同期会
昭和四十三年卒業から二十五年目の授業

76回　吉岡　俊

平成五年九月十一日（土曜日）、これまでずっと悪かった週末の天気も、今日は久しぶりに抜けるように良く晴れ上がった。午後二時半より新潟高校青山会館の二階学習室で、卒業以来二十五年ぶりの懐かしの授業が行われる。

時間前には集まった同期生はおよそ六十余名。半数は県外で活躍している。東京から連れだって参加した二人は、「始まる前に校舎の中を見て来てもいいでしょうか。とても懐かしくて」「どうぞ。よろしいと思いますよ。もう随分と傷んでおり、最近は改築の話も出ているんですよ」と幹事は勧めた。

授業前に、「授業中は禁煙ですか」と大声で尋ねる者。「勿論です。皆さんは高校生ですから」と幹事。教室内は爆笑に沸いた。こんな和やかな雰囲気の中で定刻時間がきた。一時間目は世界史。今春新潟高校を定年退職された関根彰圓先生。中世を中心とするヨーロッパ史の概観について。

古代、中世、近世を対比し、一時間の内容で西洋史を解り良く講義する。黒板に向かった後ろ姿が少しだけアルシンドにも似て、襟元の髪に白いものが目立ってきた。二十五年の歳月を感じさせる。

実に久しぶりに聴いた関根節の世界史であった。

授業の休み時間には小田一彦先生のマジックショウ。最近になって始めたという手品だけに、見ている生徒が時々ハラハラするような素人っぽいところがまた大受けの拍手喝采。ミスターマリックのマジックもすごいが、先生の手品の方が情があって好きだな。

三番目の登場は、ポン助こと高橋　満先生。英語表現における「ていねい語」の原則についてお話を頂戴した。まだまだ若さあふれる先生は、退職後の今、新潟大学で英語を教え、健康のためにいそしんでいるという登山は今年既に十七回を数える。最後は「良寛書画集」を出版したばかりの団長渡辺秀英先生。とても八十歳を越えられたとは思えない。「およそ四百首ある良寛の漢詩は、良寛自身の自叙伝である」とお話しいただいた後、黒板に次の詩を紹介され訳してくださった。

縦読恒沙書
不如持一句
有人若相問
如実知自心

懐かしさと共に感動すら覚えた授業は四時半ころに終了し、放課後を迎えた。これからは同期生のひとりが営業している信濃川河畔のウォーターフロント・サガンで宴会。

広い店内一階の半分を借り切って盛りあがること、また盛りあがること。宴会には物理の森　幸雄先生、数学の大橋禎助先生も駆けつけてくださった。渡辺先生の筆なる寄贈された五枚の短冊は、希望者のあまりの多さにジャンケンの勝ち残りで分けられる。好意に甘えた時間延長もこれまでとなり、椅子の上に立ち上がった森先生の音頭で〝ますらお〟の合唱。

再会を約束し、それぞれのグループに分かれて夜の町へ繰り出していく。

大いに満足した何とも愉快な同期会の一日であった。

72回生ゴルフコンペ開催さる

72回　渡辺毅之

来年、卒業三十周年を迎える私共72回卒業生の恒例ゴルフコンペが、安田イーストヒルズゴルフクラブで開催されました。八月十四日のお盆休みとあって、東京から、疑惑とは全く無関係の大手ゼネコン勤務の阿部君、三年前にロンドンから帰国したばかりの商社勤務の高橋君、バンコク駐在経験をもつ石油会社勤務の大野君、国際公認会計士の津野君の四名が参加。迎えうつ我が新潟勢は、公認会計士の渡辺（国）君、鋼材商社経営の渋井君、酒店経営の高木君、そしてホテル・旅館業のかたわら不動産業を営む、前東京青山同窓会事務局長の私と、総勢八名の多士済々（？）のメンバー。プレー前からの舌戦ものかは、夜来の雨が晴れ上がった中、終始なごやかなうちにプレーを行いました。86のスコアを出した津野君に、渡辺（国）君寄贈の優勝カップが授与されました。19番ホール（？）は、後輩の長井君が経営する駅南の「茜」で盛大に行われました。青山テニスクラブOB会が同所で開かれていたため、母校の石崎先生も同席され、懐かしい母校の想い出話に話が咲きました。

来年の卒業三十周年での再会を約して散会しました。

青山ゴルフ会　秋の大会

さわやかな秋晴れと暖かさに恵まれ、10月28日紫雲ゴルフ倶楽部で開催。今回は初参加者が多かったので、ダブルペリアで。優勝は75回神田正一さん、準優勝は59回飯塚実さんでした。納会を兼ねた表彰式は新潟に戻って開催。ゆっくりと歓談しました。次回の開催は平成6年6月16日（木曜）中峰ゴルフ倶楽部で行います。参加希望者は同窓会事務局までお問い合わせください。

青山ラグビー祭開催

60回　斉木守雄

青山ラグビークラブ恒例の夏の一大イベントとなりましたラグビー祭を八月一日（日）午前九時より盛大に母校グランドで開催しました。

現役は今春の総体は惜しくも新潟工業の後塵を拝しましたが、今年も花園へ向けて三年生はチームに残留し捲土重来を期して頑張っておりました。

会員の親睦と健康のため、そして何よりも後輩諸君のチームづくりの一助となるためにもOBの参加を要望してましたが、当日は56期の藤井泰介先輩を筆頭に多数のOBが出席し現役を叱咤激励しました。

○現役一軍　対　若手のOB　戦
○現役二軍　対　中老年のOB　戦

の二試合の対戦が行われ、終って生ビール（現役はジュース）によるバーベキュー大会でラグビー談義に花を咲かせました。当日は快晴にも恵まれ、アウトドア派を自認するコック長のもと、次から次へと出されるバーベキュー料理の数々を、参加者全員舌鼓を打ちながら、ペロリとたいらげました。

青山ラガーマンのチームワークがますます向上した楽しい一日でした。また当日は「KIWICLUB」による夏物のラグビーシャツ・パンツ・ストッキング等の出店を開き、祭りの雰囲気を盛りあげました。

「青山夢像館」出版記念会

60回　小林智明

創立百周年を記念して、60回生が刊行した「青山夢像館」の出版記念会は、平成五年九月十八日、越後湯沢温泉で開催された。

記念誌にご寄稿して下された十八人の恩師の中から、渡辺秀英先生、大橋信夫先生、松浪清先生、大橋禎助先生、小黒英作先生に元気なお姿を見せて頂いたのが何よりも嬉しかった。また無理な印刷をお願いしたオリオン印刷㈱の社長、石田瑞穂（67回）氏もご招待して感謝状を贈呈した。

会場の湯沢ニューオータニホテルには五十五名の60回生が新潟、東京、横浜、千葉、宇都宮など各地から参集した。変ったのでは三泊四日で苗場山を秋山郷から赤湯へと越えて来たという者、会場がわからず湯沢で迷子になり、記念撮影に遅れた者もいた。

セレモニーは和やかに挙行され、最後に編集長の佐々木城君の労をねぎらって感謝状を贈り、乾盃した。

三年がかりで刊行した九百頁余の枕のような大冊の記念誌の出版を喜び合い、学窓の頃の思い出話に酔い、お互の健在を確かめ合い、温泉にも浴し、還暦の髪の霜を笑いながら次会を約束した。

MUZO会 第一回親睦ゴルフコンペ

60回　斉木守雄

恒例の秋の青山同窓会ゴルフ大会の前哨戦として今回60回生だけのゴルフコンペを開催しました。

場所は笹神五頭ゴルフクラブ
日時　七月二十一日
　　九時四十八分
　　五頭コーススタート
競技方法　ダブルペリア方式
参加者　小林亨、富山祐男、小林昭二、小林智明、斉木守雄、熊谷忍、成田禎作、市川豊、五十嵐健一、森義夫、堀浩一、斉藤保夫

今年から全員が六十才でシニア入りとなった。

学生時代に鍛えた足腰も四十年間のブランクで体が硬くなって飛ばなくなったせいか我流のせいか皆な「好きこそものの上手なれ」の諺が必ずしも眞理でない好例と言えそうなスコアーに甘んずる状態であった。しかし気心の知れた仲間たちと童心に戻って終日騒ぎ廻ることは格好の気分転換の場にもなった。

還暦を迎えた我々としてはこれ以上の上達は望むべくもないと心得ているが、九十八才でも元気にクラブを振っているプレーヤーがいる話を耳にすると、我々もそれに近い年令までプレーが出来る状態を維持したいと思う。

プレー終了後「でん」にて表彰式と懇親会を行った。ちなみに今回のゴルフコンペの優勝は平均的な力を発揮した小林亨君、準優勝は富山祐男君でした。

ぐみ原逞しく育て 68回生卒業30周年記念植樹の碑建立

68回　北村泰作

一九九〇年、卒業満三十周年を迎えた我々六十八回生は、「せっかくの三十周年を飲み会だけで終らせるのは惜しい」との意見から話がまとまり、「白い浜辺の真っ赤なぐみの実、なつかしい風景をもう一度」のメインコピーで、新潟日報一ページ全面意見広告を九月十八日付で掲載。記念ゴルフ大会と記念パーティーを九月二十三日に開催した。翌九月二十四日に当時未だ工事中であった、新潟市青山海浜公園に於て、ぐみの苗木二百五十本を植樹した。（以上は青山同窓会会報第52号・平成3年1月23日発行に詳細掲載されています。）

さて、その青山海浜公園の整備も無事完了し、ぐみの苗木もすくすくと育ち始めたので、このほど当初の予定通りささやかな記念碑を建てさせていただいた。

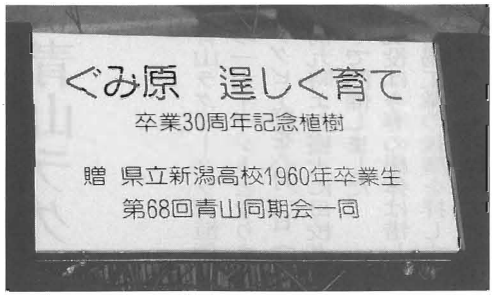
「ぐみ原逞しく育て
卒業30周年記念植樹
贈県立新潟高校
1960年卒業生
第68回青山同期会一同」

この碑文がアルミ&ステンレス製の碑に刻まれている。大きさもタテ25㎝、ヨコ55㎝、高さ80㎝と本当に小さなものではあるが、まわりに植えてあるぐみの木とのバランスを考えれば、ちょうど良いくらいかなと考えている。

つい先日、冬には珍しい位のおだやかに晴れた日、碑はどんなになっているかなァと思いながらふらりと公園へ行って見たところ、時折通りかかる家族連れが、碑の前に足を止めて二言三言話をしながらうなずきあっているのを見かけた。そしてこのささやかな植木が、ふるさと新潟の自然環境づくりの一助になればと願う我々の思いを、少しでも理解してくれている人がいるとわかって、ほのぼのとした気持で三十年前の青春の浜に想いを馳せていた。

この記念碑建立を以って我々の卒業三十周年記念行事は全て終了し、あとは四十周年（ちょうど二〇〇〇年）を待つばかり!!となったが、果たして如何なるやら…。

最後になりますが、この記念イベントに絶大なる御支援、御協力をいただいた新潟市公園緑地課を始め、関係各位に厚く御礼を申し上げます次第です。



山岳部創部40周年誌『ふくろう』発刊記念OB会について

75回　安藤裕司

新しい年を迎えたばかりの平成6年1月3日、新潟駅前クオリスビル5階の『信濃川』は、山岳部のOB77名と旧、現顧問5名の82名という大人数で盛り上がっていました。

高校のクラブ活動の中で、それほど脚光をあびずに、ただ黙々と山に登った仲間達が、創部40周年誌の発刊記念ということで、北は仙台、山形から、東京それに南は大阪、神戸から駆けつけてくれました。

……昭和27年4月、春たけなわの関谷浜の一角に、ニキビを気にした青山健児が5人寝そべっていた。「どうだ、山岳部を復活しようじゃねえか」……

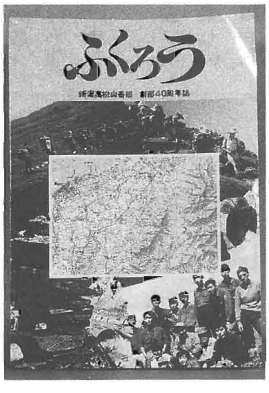
こうして誕生した山岳部は、盛んな年あり、少し停滞の年もあったが、途絶えることなく連錦40年の歴史を数えるにまで至った。昭和29年から平成5年卒業迄のOBは、総数226名にのぼり、顧問は、旧10名、現3名。OGの数も、昭和40年に初めて女性が2名も入ってきたのが始まりで、合計10名にも達しています。

平成5年2月の新年会の席、「皆なで原稿を持ち寄って、記念誌の発刊を!」がスタートで、年末12月25日に発刊することができた。費用は、OBからの寄附金で賄われ、顧問よりの奉賀もあり、多少の黒字で決算できそうです。

山岳部の40周年誌『ふくろう』と、全員の協力で発刊され、40年の歴史が集大成されています。

予定した2時間というOB会も、一緒に同じ釜の飯を食った先輩、後輩、顧問の懐かしい人達との歓談で、アッという間に過ぎ、山の歌の合唱、フレフレ青山／山岳部!のエールで閉会しました。

追記：このOB会にて、山岳部OB会の会長に、石田瑞穂氏（67回）が選出されました。



白根青山同窓会記

35回　五十嵐久四郎

秋酣（たけなわ）の十月十七日久方振りに白根市割烹大清に於いて白根青山同窓会を開催した。集まる人三十有余名午後五時斎藤幹事が開会を宣す。小生下手な会長ですが先ず挨拶。五年間の校歌「玲瓏の天」に愛着を持つ事を話し、他の高校の校歌も余談でしたが話をした。二十九年の火災の際の募金の件にもふれましたが、眼前に髣髴する焼失前の学舎の姿を思い出し感慨無量でした。尚青山健児であられる竹内先生が、白根市長に当選されました御祝いの言葉を、集まる機会がありませんでしたので遅まき乍ら申しあげました。

ご出席をお願いした瀧沢校長先生より母校の近況やらいろんな御話をおうかがいし、懐しさ一杯でした。市長さんの挨拶も貫録のある態度で市政を担当する言葉あり。やがて四十三回卒の長沢さんの乾杯の音頭のもとに酒宴が始まる。美人の御酌につられて益々元気潑溂「玲瓏の天」がでる、若い人からは「百里流れて」がでる。

サアサア青山健児の皆さん飲みましょう、食べましょう、語りましょう、そして歌いましょう。

和気藹々（あいあい）の内に元気益々旺盛「丈夫の」から「霞たなびく」等、数々の応援歌ずくし。みんなですべてを忘れ一致団結の同窓会は良きものなりと感慨新たなり。母校は有難きかな。

人生は熱く生きなければならないと言う言葉がある

我が同窓会も進もう、進みましょう。目的に向かって熱き力を以て

午後八時半山崎副会長の万歳三唱で宴を閉じる。この度の開催には薄田、藤田両幹事のお骨折に対して厚く御礼申しあげます。

来年も亦是非開催する事を約束する。

〈留学体験記〉イギリスでの生活

94回　赤井田麻未

新潟高校に在籍中、私は英語が得意ではなかった。津田塾大学に入学後は、その英語と朝から晩まで格闘しなければならないという大変な毎日で、休みになると英語から逃れるべくサークルの仲間と山に登っていた。しかし大学三年の時、英語と私の関係は変わった。ゼミで高見幸郎先生から教えていただくようになってから、もともと本好きな私は、イギリス小説の原書のおもしろさ、魅力にひきつけられていった。さらにこの年ケンブリッジに二カ月間、語学留学に行けるという幸運に恵まれた。英語は難しく厄介なものではなく、人と人とを結びつけコミュニケーションを可能にしてくれるものであると実感するようになったのはこの時からである。

大学院に入ってからは論文に追われた。研究生活は充実していたが、常に「学問も大事ではあるが日々変容する国際社会の中に生きる人間として外にも目を向けなければならないのではないか」という思いに駆られていた。そんな私を先生や先輩方が励ましてくださり、一九九二年から一年間、ロータリー財団の奨学生としてエジンバラ大学の大学院に留学できることになった。

エジンバラ大学は歴史が古く、十六世紀に創立された総合大学である。英国スコットランドの首都、エジンバラは、エジンバラ城を中心に古い街並が広がる独特の落ちついた雰囲気をもつ美しい街である。そのような恵まれた環境の中で生活できたことは本当に幸せであった。しかし、実際、勉強がたいへんで、大学と寮との往復以外は外出もできないような毎日だった。大学では、授業で繰り広げられる非常に活発なディスカッションに、私は何と新鮮な刺激をうけたことか。友人達が偉い先生を前にしても怯むことなく、「自分はこう思うが」と自分の考えをもとに果敢に挑んでゆく姿に息をのんだ。このような環境の中で私が学んだことは、自ら学び自ら考えることの大切さ、そして楽しさである。

人の暖かさ、ありがたさを身をもって知ったのもこの留学を通してである。遙か遠く日本から常に愛情のこもった手紙を送り続けてくれた両親、恩師、友人。そして、寮で共に生活した世界各国からの留学生たち。彼らとは毎日一緒に食事を作り、「同じ釜の飯」を食べ、家族のように喜び悲しみを分かちあった。国籍、肌の色が違っても愛情があれば、お互い心が通じあうのだ。彼らは私の一生の宝物である。

新潟高校で自由闊達な精神のもと、のびのびと学べた私は非常に恵まれた学生だったことが改めて実感された。というのも、英国と日本では女性の置かれた立場が違うのを目の当たりにしたからである。国際的な視点から考えて、日本において私たちがより一層積極的に取り組むべき問題の一つに女性問題があると実感した。女性も一人の人間として自己実現がはかれるような社会を作っていくべきではないか。この留学の経験を生かしつつ、将来、教育という仕事を通して社会に何かしら貢献できたらと考えている。

青山同窓会収支決算書・収支予算書

収入の部　（自 平成４年４月１日 至 平成５年３月31日）（自 平成５年４月１日 至 平成６年３月31日）

科目	平成４年度決算額	平成５年度予算額
繰越金	2,762,312円	2,899,000円
入会金	1,257,000	1,228,200
会費	6,193,000	3,500,000
雑収入	100,907	30,000
合計	10,313,219	7,657,200

支出の部

科目	平成４年度決算額	平成５年度予算額
人件費	1,280,840円	1,200,000円
通信費	720,287	1,000,000
印刷費	154,398	300,000
慶弔費	144,570	150,000
会報印刷費	565,670	700,000
会議費	489,075	850,000
卒業生記念品代	238,000	250,000
青陵祭補助	100,000	補助金
通信制補助	303,000	600,000
退職積立金	100,000	100,000
諸費	52,199	100,000
予備費	265,792	2,407,200
合計	4,413,831	7,657,200

次年度繰越金 2,899,388円
平成５年４月27日
上記の通り相違ないことを確認致します。
福山 健㊞
早福 卓㊞

あの頃のこと

＝昭和三十四年 京都＝

67回　石田瑞穂

十一月の終わり、紅葉も盛りを過ぎようとする京都に集まれと、大学（同志社）の学部仲間から召集令状。金曜日の午後四時に折から学園祭盛りのキャンパスに集合した。卒業して三十年の記念である。

新潟高校を卒業して、大学に入ったのが昭和三十四年。

あのころ、お昼に新潟駅を出発する蒸気機関車に引かれた列車は、暮れて行く日本海を眺めながら、金沢辺りで夜を迎えた。明けて行く琵琶湖を見てもまだ走っていた。京都駅につくのが朝の七時前であった。駅舎の上の食堂で、関西風のお茶漬けの朝食をとると遙々来たものだと思った。あこがれの町京都での学生生活は、学業もさることながら、あちこち見て歩くことが楽しかった。観光ブームの昨今の京都と違い、修学旅行のコースの少し外まで足を延ばせば、庭を眺めていて、一日中人に会わないような、古刹もあった。もちろん拝観料などもなしである。

あの頃同志社大学には、新潟県人会と言うサークルがあった。県内の各高校の出身者が集まっていた。新入生の下宿の世話や、試験に通りやすい先生の情報やら、細かい面倒を見てくれた。「青山」の二年先輩高橋貞夫さん（65回）が居られ、いろいろ親切な指導を受けた。初めて親元を離れて、心細いときにうれしいことであった。最初の下宿は、試験のとき泊めてもらった県高山岳部の先輩、阿部泰介さん（64回）の住んでいる三十人ほどの学生アパートにした。今、国際会議場で賑わう宝が池のすぐ下にあった。

父親が送ってくれる一万円でバイトもせずに一カ月の生活ができた。学校食堂の定食が四十円、素うどん十円、きつねうどん十五円であった。のどかな田圃わきの道を十分も歩くと京都の名門校、洛北高校があった。そこで市電に乗り、下鴨神社のわきを通り、加茂川と高野川の合する河原町今出川で降りる。そこはもう京都御所の東北角である。大学キャンパスに接する御所の庭は、休講のときのよい休み場であった。雑談をしたり、草野球をしたり、そんな仲間が十数人いた。こういった仲間がなつかしいこの同期会の面々である。卒業後も京都に残っている幹事が声をかけてくれる。五年ごとに集まるが、会えばすぐ二十才のころにタイムスリップする。

当時関西の大学へ進学する青山卒業生は非常に少なかった。それだけにまた個性的であり、互いに親近感も深く、京大、同志社、立命館、取り混ぜての青山同窓会を開いたものだった。年に数回、すき焼きコンパなどであった。京都の四辺に点在して住んでいたので、観光や、史跡、お寺巡りの情報交換などもあった。県人会にならったような気がする。妹が二年後に中央高校から同志社に来たので、この青山の会には中央高校の卒業生も何人か交じるようになった。一年の終わりに学校の近くの下宿に変わった。京都風の狭い間口の潜り戸から土間を抜けて、離れの二階であった。食事は、外食食堂に通った。冬の朝、裸足で下駄を履いて飯を食べに行くと、新潟の人はと呆れられたものだ。下駄と言えば、同郷の星野清君（67回）が繁華街の河原町の市電のレールに下駄の歯を挟めて市電を立ち往生させたこともあった。ふろの帰りに手ぬぐいが堅くなったり、朝起きると手水鉢の水が厚い氷になっていたりした。京都の冬は新潟よりも底冷えがした。昭和三十八年に卒業して、名古屋で銀行に就職した。初任給は家から送ってもらっていた二万円よりも少なかった。父親の大病で、一年で退職、帰郷して以来新潟で三十年の月日が経ってしまった。四人の娘のうち三人までもが、順次いろいろな京都の大学に学んだ。最後の娘が、大学の後輩になった。今も県人会はあるかと聞いたら、もうずっと昔にそう言うのはなくなってしまったそうだ、という。せっかく新しい世界を求めて大学生活を始めるのに、いまさら同じ県出身者とか、高校同窓会などは流行らないのだ、と言われてしまった。

あのころの新潟と京都の時間距離と今とでは、考え方も変わってしまうのかなあと思った。

京都を訪れる機会も度々あったがそういえば、少しづつ町も変化していた。最初に住んだ洛北の、のどかなたんぼ道などもすっかり形を変え、今では東山から宝が池、北山へと続く新しい街並みになっている。

思い出話をするようになると老人になった証拠だ、と娘たちに笑われる。それでもあのころの町のたたずまい、人との交わりが懐かしく思い出される。

祇園のお茶やさんで、舞妓さんの踊りを見ながら来し方を語り合う同期生たちもそれぞれに三十年の年輪を刻んでいた。

あのころ、青山を卒業してともに京都に学んでいた仲間たちとも一同に集まりたいとふと思った。

青山を想う
―女は、まずらおを歌えない―

77回　瀬賀孝子

卒業した今でも、77回生の私は「やはり新潟高校は男の子の学校だ！」と思う。

新潟に残りビジネスの世界に進んでいって、はじめて新潟における「青山」の有難味に気づいた。けれど、同窓生としての不思議な something を共有し得ない自分を感じることがある。時々参加するミニ同窓会（済みません。総会は百周年の時、一回こっきり参加しただけなので……。）で、宴たけなわになった頃みんなで「ますらお」を歌うことになる。顔を真っ赤にして吠えるように歌う男性群に混

（次頁へつづく）

（前頁よりつづく）

じって、私はうつむき加減でつぶやくように、なんとか声を合わせる。どうしても違和感をぬぐえない。彼等と同じようには歌えない。女の私はやはりよそ者なのだと思ってしまう。

「青山」は男の世界なのではないだろうか？

性的役割分業意識を持たずに育った私は、「男女の能力に性差はない。あるのは個人差のみ」という価値観で、ビジネス社会を突っ走ってきた。七年前に脱OLを図り、五年前に女性だけのコンサルタント会社㈱WITを始めた。組織の力に守られない自分の力だけで勝負することを続けてきて、ビジネス社会における男同士の連帯のあきれるほどの強さと深さに驚いている。かなわないなぁ～とこの頃は素直な気持で一歩引くことを覚えてしまった。「ますらお」を歌う時の私の違和感は、かなわないなぁという気持に変わっていくようだ。

今年一九九四年一月三日の正月早々、私は青山のますらお達と宴たけなわの頃の歌を歌うことになった。

新潟高校の諸クラブの中でも最も男っぽいクラブ山岳部の四十周年の集まりがあった。そう私は山岳部初の女性部員だったのだ。新潟高校山岳部は、石黒久というエベレスト登攀者を輩出した由緒あるクラブである。当時何もわからない元気がよいだけの少女だった私は（なにしろ私のニックネームはメガ…メガトン級のハリキリガール…だった）、「女人禁制なんてナンセンス」の御旗（みはた）を掲げ、優しい教育者であるクラブ顧問片岡久先生の庇護の下で、ズカズカと男の世界に入っていった。

私は本当にわからなかったのだ。男の子達のとまどいや憤り、女の子への好奇心や違和感、迷惑やわずらわしい思い……が。ただ、入学して三階の教室に初めて入った時、窓に広がる雪を被った越後の山々の美しさに感動し、あの山頂に立ちたいという想いだけで、高校時代を突っ走ったのだ。

あの頃は何のためらいもなく、一つのテントの中で彼等と同じように声を張り上げて、山の歌やY歌（当時全く意味のわからなかった）や「ますらお」を歌っていたはずだ。

時間が経ち、みんなの中に一つの連帯感が出き上がった頃、肩を組んで山の歌を歌い始める。私は昔のようにはその中に入っていけなかった。女だからか？「ますらお」を歌うような違和感を覚えた。こんな思いをするとは考えてもみなかった。新潟高校山岳部は男の世界なのだ。

同じように青山同窓会は男の世界なのではないか？ 女の私はもはや「ますらお」は歌えない。

男であるというだけで尊敬はしない。けれど、尊敬できる人は女より男がはるかに多い。この現実の中で「ますらお」を歌えない私はどう生きていったらいいのだろうか？

（新潟在住。㈱WITの代表取締役）

＝連載＝

ハイティーン水泳 新中・新高⑱

60回 平田大六

31 海で泳ぐな

一九四九年、私が高校一年生の秋、五十八回の中村均、北井一郎、久須美博（故人）、竹内茂（故人）の諸先輩は、部をゆずってゆかれた。その二年前、四十七年には併設新潟市立第二中学校として新潟小、鏡渕小の卒業生が間借りをしていて、水泳部にも所属していた者がいた。江口良助（61回）君もその一人であるが、彼の想い出話（註1）によれば、いやいやながら尊父の江口文助（21回故人）先輩のすゝめで四八年の夏入部したことになっている。このように下級生がいたにもかかわらず、部下とかの意識がなかったのは、その人達が「併設中学」であったからであろう。実際に、大黒善弥（50回）監督がいわゆる手塩にかけて育てあげた併設中学生の選手たちの多くが、他の高校へ受験していったのである。ライバルを養成していたようなものだったと、後に大黒監督は述懐されている。

十月になって私たちはようやく海で泳いだ。これは、シーズン中は海で泳ぐことを厳重に禁じられていたからである。理由は簡単で、海水は真水とちがって比重が大きく体が浮きすぎ、しかも波があって、泳ぎのフォームがくずれるのだ。特に私のような長距離選手の場合は、手足の動きの微妙なバランスの上にたってはじめて持久力を有効にひきだすことができる、と大黒監督はおっしゃられる。

だから、解禁の十月になると、私たちは喜々として関屋浜へでかけていった。しかし、海のほうもシーズンオフ、夏のにぎわいは少しもない。ただ初秋の荒海があるだけだ。

それでも私たちは海に入った。二メートル程の高波でも、わずかに沖へ出てしまえば、これがゆるいウネリになっていることを知っていた。しかし、離岸や接岸に失敗すれば、波にのまれ砂底にたたきつけられ、おおげさに言えば、息たえだえ瀕死（ひん）の痛手をおうことになる。

そして、いつのまにか私は、荒波を御（ぎょ）する術（すべ）を副産物的に身につけていったのである。

32 正式の下級生

五十年四月、高校二年生になった山本（青柳）淳夫と私は、新入生をあてこんで、水泳部PRのポスターを画きはじめた。もう校舎の廊下の壁は運動部のポスターだらけである。そして、その目的とはウラハラに、出来のよいのはどれだとか、誰が画いたとか、の話ばかりできめはない。

ポスターだけでは手ごたえがないので、かつて私たちが網にひっかかった時のように、プールで本番泳ぎのデモンストレーションもやってみた。しかし、このデモはせつない。シーズンのはじまりは五月一日なのに、それよりも一ケ月もはやい。きたない水はとりかえて、キラキラ光るように

（次頁へつづく）

（前頁よりつづく）

きれいにしておかなければならない。泳ぐのだって、あたたかそうに笑顔を見せなければならない。

桜の蕾もまだかたい時期にである。冷たい水に体を沈めてニコニコして見せる。正気のサタではない。

結局、入部してきたのは、峰田（倉田）明君や前述の江口良助君らわずかの下級生たちであった。江口君は、「併設」の頃からの同志だから、ポスターも、デモンストレーションも歩どまりはきわめて悪いと言わねばならない。

しかしながらわずかでも、正式に受験合格して入部してきた者たちだから、「併設」時代の内縁関係ではなく、私たちのシゴキの対象にはなりそうであった。

一方、混浴相手の新潟中央高校の女子水泳部の人たちはどうなったのだろう。今年はもう新高プールを借りには来ないらしい、というようなわさ話が上級生の間でとりざたされていた。やっぱりだめか。私たちより一年上の五九回生には、女どもをうならせるような男前はいないのか。しかし、口には出さない。このことは、表むきは私たちの練習には関係ないことだから。大黒監督に知れようものならその場で破門されてしまう。

ところが、とうとうやってきた。中央高校の水泳部が今年もきたのである。しかも、新入生数人も含まれていた。制服もジャンパースカートになり、襟に結んだリボンの色は、三年青、二年緑、一年赤。きっぱりしたもんだ。

（つづく）

（註1）青山水友会報・一九八五、江口良助

後輩の活躍（上位入賞）

○全国選抜高校テニス大会北信越地区大会
男子優勝　山崎洋大
○第15回BSN高校剣道選手権大会
男子団体優勝
女子団体3位
男子個人3位　高橋勝
○フェンシング　秋季総合体育大会
男子団体2位
女子団体優勝
○全国高校空手道選手権大会県予選会
女子団体型3位
女子個人型2位　野沢和子
○第18回BSN高校柔道選手権大会
個人中量級2位　佐藤大彦
軽量級3位　河内祐樹
○水泳　秋季県大会
男子200m個人メドレー
優勝　勇崎義紀
男子50m自由型
2位　勇崎義紀
女子100mバタフライ
2位　小縣文
○全国高校サッカー選手権大会県予選会　3位
○ラグビー
NHK杯3位
全国大会県予選会3位
○卓球
県ダブルス選手権優勝
藁科玲子・綾子
秋季県大会シングルス
優勝　藁科綾子
2位　藁科玲子
○物理部
フィールドデイコンテスト
社団局A　信越1位
全国24位
○第39回青少年読書感想文全国コンクール県予選
第2類
優秀賞　荒城あゆみ
○第1回県高校百人一首大会
優勝　村松朝子
2位　籠島正忠

編集後記

◎　明けましておめでとうございます。百周年が過ぎて、なお益々盛んな同窓会です。節目節目に行われる記念同期会。今号には、二十五周年の七十六回生、三十周年の後日談の六十八回生からそれぞれ原稿を戴きました。準備から実行まで、幹事さんたちのご労苦に心からねぎらいを送りたいと思います。

◎　毎年会を開いている四十二回からもお元気な様子が届きました。これも元気な六十回、還暦の祈禱に、青山夢像館の発刊記念、そのほか親睦ゴルフ会と一年間何回も会合の様子です。このほかにも毎月有志の幹事会とか、頭が下がります。

◎　地域の同窓会として、竹内市長も同窓の白根から報告がありました。

◎　有志による同好会として青山ゴルフ会も春と秋の2回開催で、続いております。そのせいか同期のゴルフ会の報告もありました。

◎　山岳部、ラグビー部、クラブ活動を通じての先輩後輩はいつまでもいいものですね。山岳部は四十周年とて、親子以上の年の開きも何のその、楽しい集まりでした。

◎　編集部よりお願いして、寄稿戴いた、石田、瀬賀、赤井田さん、急なご依頼にもかかわらずありがとうございました。いつも楽しい連載の「水泳、」平田さんにも感謝しています。

◎　会報は年2回の発行なので、どのような内容の編集がいいのか、編集子もいつも頭を悩ませています。限られた紙面に、会員に楽しんで読んで戴ける記事、報告をと、考えておりますが現状いかがでしょうか。編集方針は、新潟、東京の総会関係、同窓の活躍の様子、（同期生からの報告、編集よりのインタビュー）同期会、クラブ、地域、趣味、その他の会合、などを主に、ときには特別企画なども組みます。寄稿も待っていますが、こちらから依頼することもあります。百周年を祝った同窓会としては、会員の年齢の幅もそれだけ広がっています。女性の会員の数も増えて来ています。会員の住んでいるところも国内各地はもとより世界にまたがっています。ときには先輩に歴史をたずね、若き現役OBの活躍を追い、一層楽しい会報にしたいと思っています。よろしくご協力ください。

◎　まだ続くと言われます、この経済不況ですが、少しでも早い回復を願って同窓会員各位のそれぞれのご健康、ご活躍をお祈りします。（石）

青山同窓会会報

彦一子宏子雄直人子幸隆子世実明綾と治男子
一耕知泰隆敬和孝昌礼恒英まこと健美美美津
79回
井瀬野沢沢世林林川保橋沢沢井尾尾田田田田
板岩小金金久小小笹神高谷滝敦寺寺長谷谷谷
青赤五十伊伊伊今遠岡小大奥川川河倉久斉佐佐佐三白進高田田田豊内野長平本丸山山吉横
池植太斉耕山
朝砂坂武長鷲
大三島土渡
83回
五十植岡片加木木木熊高玉良仁根古
84回
百憲正
相岡神神木笹高諸村山
今岩笠船
阿瀬
石清三灰
今江河早城
小
通信制
274名

子子潤諒隆子寛陸均隆夫耕健生弘夫之男弘紀造明憲明栄彦子秀彦巳衛裕助
陽法祥秀文隆良富雅秀常勝芳秀秀一慶明博俊一兵誠之
75回
本原泉井田田森橋滝門井上井賀平川川川田田木木中橋枝澤井井神神田川
石石和今上薄大大大加金川黒古橋斉笹志鈴鈴田高戸富永永広広藤古本吉
安石石伊伊伊上大大大小大大勝加加川神小小斉斉佐坂佐佐清渋曽田谷谷高高高玉塚常富富馬桧廣藤福星星堀南皆室武山山渡若
渡
雄臣義攻明樹子宏夫信豊明子樹衛三一子治子郎一子男子郎子紀弥紘洋雄生雄夫滋ツ修子郎二実
伴忠正俊義道泰由英礼栄牧隆誠晃直敦和賢朝保雅重勝和邦忠紀セ祥士宏美邦
水田本木根野橋野中中辺尾田藤野野田田輪井林山山井井間田原田上野下田井口田田宮頭部
71回
石石和今上薄大大大小大大勝加加川神小小斉斉佐坂佐佐清渋曽田谷谷高高高玉塚常富富馬桧廣藤福星星堀南皆室武山山渡若
渡
雄臣義攻明樹子宏夫信豊明子樹衛三一子治子郎一子男子郎子紀弥紘洋雄生雄夫滋ツ修子郎二実
伴忠正俊義道泰由英礼栄牧隆誠晃直敦和賢朝保雅重勝和邦忠紀セ祥士宏美邦
水田本木根野橋野中中辺尾田藤野野田田輪井林山山井井間田原田上野下田井口田田宮頭部
71回
田部藤木沢上沢倉島林間藤井沢橋村村村沢野原山山内下本林
阿阿伊植小川柄熊鴻小本近菅滝高中中西野萩坂松丸村山山山若
青阿荒池石石今内栄大神北黒熊小後後斉佐志清菅祖高立田冨中内成成丹細堀本牧松松松三渡渡渡
72回
海部井田井田井山山木野林村木谷林藤藤藤野賀本又江橋
父父中田戸藤沢沢羽谷内間野原永田国部辺辺
73回
部部田田田川山野藤藤木野崎島中木川野原川口場
阿阿石石小小佐斉斉鈴関高田田田鶴外中中長樋
相
宏雄真仁穂治彦允昌子吾助男朗市透二郎司治昭子爾幸モ一子子治作八和郎久子雄果薫二則也博男敏臣潔肇一弥夫正大雄男衛吉子彦征敬孝弘健夫
秀一敬達忠真建哲真史十五俊賢晋正修公卜晃嶺敦建泰林公進和喜忠正泰広喜美利世康光憲正輝和修良昌益清
井松村野井野山野井川山田田部塚部達子嵐黒原田藤村村崎村藤野林藤藤藤藤藤藤藤藤藤藤木磨川野中見石石中主田尾島田田口田崎尾野内山取山
寺戸伊中水原広星福星松松丸右山田上上上川北後今駒近進斉斉佐佐佐鈴須関関田高竹田田池土寺中西原樋福藤宮星堀丸梁横
青阿石石池伊今大大小藤小小小小佐里城菅高田塚土敦寺栃宮堂垣西新広藤本吉山山吉若
69回
夫男明史浩郎尚昭良夫夫剛治夫郎元美禰郎司夫次一雄茂郎雄雄孝弘夫郎皓雄昭恒彦夫郎徳司博平裕美子也青雄子子敏敏夫輔郎彦丸男裟也雄允史一夫一子弘三之美志子郎晃也春司雄治子一雄郎樹彦之一誠梁明利二子孝央子光弘康稔功門
哲不忠隆三達快和政征修一隆通成美啓明英孝泰一昭良勝貞幹三達義貞敏武勝良勝睦澄勝輝美奈智美一左利誠士治芳政和正義博亮靖聰孝勝兼誠春啓裕順友興篤敏文敬健邦藤宏靖克精利忠莞請直喜正喜
川藤藤野田見田栗沢橋村崎堀関崎原間巻路合滑田林藤藤藤藤藤藤谷井木木我橋沢崎田場波口崎福見井林林本山野木田井田田
荒伊伊池池石泉宇梅小小大北大大尾尾笠風金河川木久小後近近佐佐摩渋白鈴鈴曽高滝寺城南雄野野早伏藤三三松丸水村山吉吉薄池池行今榎小小加鳳加金北合小小小桜下鈴関関高竹寺中野二丹長橋橋福福星本松丸矢渡渡山山横
吉田六左エ
67回
川藤藤野田見田栗沢橋村崎堀関崎原間巻路合滑田林藤藤藤藤藤藤谷井木木我橋沢崎田場波口崎福見井林林本山野木田井田田
荒伊伊池池石泉宇梅小小大北大大尾尾笠風金河川木久小後近近佐佐摩渋白鈴鈴曽高滝寺城南雄野野早伏藤三三松丸水村山吉吉薄池池行今榎小小加鳳加金北合小小小桜下鈴関関高竹寺中野二丹長橋橋福福星本松丸矢渡渡山山横
吉田
67回
部井井上泉野滝川野崎村田村
阿石石井今大大小小小岡奥岸北君桑小佐佐塩白菅瀬関高高高田田滝田
瑞一信隆正ト勝紀興紘英哲晋八邦俊重一昭信三直
智俊糟郎作治通宏エ義功男治一夫治子夫一満節登三一亨夫郎史元収
正鎌俊蓉善正秀克瑞弘正利清大健昌光和和紀泰修忠弘健政幹安
代井原泉藤口井脇谷名川川山田藤原子田藤原泉林林林藤藤藤藤井井川賀
網石石和伊猪今岩魚蝦小小小小岡加笠金川近桑小小小小斉斉斉斉斉斉酒佐志
耿二夫子允孝昭迪茜彦技良一邦策仙三人男雄代昭嘉平正道統輔行子恵雄
宏雄真仁穂治彦允昌子吾助男朗市透二郎司治昭子爾幸モ一子子治作八和郎久子雄果薫二則也博男敏臣潔肇一弥夫正大雄男衛吉子彦征敬孝弘健夫
秀一敬達忠真建哲真史十五俊賢晋正修公卜晃嶺敦建泰林公進和喜忠正泰広喜美利世康光憲正輝和修良昌益清
井松村野井野山野井川山田田部塚部達子嵐黒原田藤村村崎村藤野林藤藤藤藤藤藤藤藤藤藤木磨川野中見石石中主田尾島田田口田崎尾野内山取山
寺戸伊中水原広星福星松松丸右山田上上上川北後今駒近進斉斉佐佐佐鈴須関関田高竹田田池土寺中西原樋福藤宮星堀丸梁横
青阿石石池伊今大大小藤小小小小佐里城菅高田塚土敦寺栃宮堂垣西新広藤本吉山山吉若
69回
夫男明史浩郎尚昭良夫夫剛治夫郎元美禰郎司夫次一雄茂郎雄雄孝弘夫郎皓雄昭恒彦夫郎徳司博平裕美子也青雄子子敏敏夫輔郎彦丸男裟也雄允史一夫一子弘三之美志子郎晃也春司雄治子一雄郎樹彦之一誠梁明利二子孝央子光弘康稔功門
哲不忠隆三達快和政征修一隆通成美啓明英孝泰一昭良勝貞幹三達義貞敏武勝良勝睦澄勝輝美奈智美一左利誠士治芳政和正義博亮靖聰孝勝兼誠春啓裕順友興篤敏文敬健邦藤宏靖克精利忠莞請直喜正喜
川藤藤野田見田栗沢橋村崎堀関崎原間巻路合滑田林藤藤藤藤藤藤谷井木木我橋沢崎田場波口崎福見井林林本山野木田井田田
荒伊伊池池石泉宇梅小小大北大大尾尾笠風金河川木久小後近近佐佐摩渋白鈴鈴曽高滝寺城南雄野野早伏藤三三松丸水村山吉吉薄池池行今榎小小加鳳加金北合小小小桜下鈴関関高竹寺中野二丹長橋橋福福星本松丸矢渡渡山山横
吉田六左エ
67回
部井井上泉野滝川野崎村田村
阿石石井今大大小小小岡奥岸北君桑小佐佐塩白菅瀬関高高高田田田滝田
瑞一信隆正ト勝紀興紘英哲晋八邦俊重一昭信三直
智俊糟郎作治通宏エ義功男治一夫治子夫一満節登三一亨夫郎史元収
正鎌俊蓉善正秀克瑞弘正利清大健昌光和和紀泰修忠弘健政幹安
代井原泉藤口井脇谷名川川山田藤原子田藤原泉林林林藤藤藤藤井井川賀
網石石和伊猪今岩魚蝦小小小小岡加笠金川近桑小小小小斉斉斉斉斉斉酒佐志
耿二夫子允孝昭迪茜彦技良一邦策仙三人男雄代昭嘉平正道統輔行子恵雄
79回
井瀬野沢沢世林林川保橋沢沢井尾尾田田田田
板岩小金金久小小笹神高谷滝敦寺寺長谷谷谷
青赤五十伊伊伊今遠岡小大奥川川河倉久斉佐佐佐三白進高田田田豊内野長平本丸山山吉横
池植太斉耕山
朝砂坂武長鷲
大三島土渡
83回
五十植岡片加木木木熊高玉良仁根古
84回
百憲正
相岡神神木笹高諸村山
今岩笠船
阿瀬
石清三灰
今江河早城
小
通信制
274名
子子潤諒隆子寛陸均隆夫耕健生弘夫之男弘紀造明憲明栄彦子秀彦巳衛裕助
陽法祥秀文隆良富雅秀常勝芳秀秀一慶明博俊一兵誠之
75回
本原泉井田田森橋滝門井上井賀平川川川田田木木中橋枝澤井井神神田川
石石和今上薄大大大加金川黒古橋斉笹志鈴鈴田高戸富永永広広藤古本吉
安石石伊伊伊上大大大小大大勝加加川神小小小斉斉佐坂佐佐清渋曽田谷谷高高高玉塚常富富馬桧廣藤福星星堀南皆室武山山渡若
渡
雄臣義攻明樹子宏夫信豊明子樹衛三一子治子郎一子男子郎子紀弥紘洋雄生雄夫滋ツ修子郎二実
伴忠正俊義道泰由英礼栄牧隆誠晃直敦和賢朝保雅重勝和邦忠紀セ祥士宏美邦
水田本木根野橋野中中辺尾田藤野野田田輪井林山山井井間田原田上野下田井口田田宮頭部
71回
田部藤木沢上沢倉島林間藤井沢橋村村村沢野原山山内下本林
阿阿伊植小川柄熊鴻小本近菅滝高中中西野萩坂松丸村山山山若
青阿荒池石石今内栄大神北黒熊小後後斉佐志清菅祖高立田冨中内成成丹細堀本牧松松松三渡渡渡
72回
海部井田井田井山山木野林村木谷林藤藤藤野賀本又江橋
父父中田戸藤沢沢羽谷内間野原永田国部辺辺
73回
部部田田田川山野藤藤木野崎島中木川野原川口場
阿阿石石小小佐斉斉鈴関高田田田鶴外中中長樋
相
宏雄真仁穂治彦允昌子吾助男朗市透二郎司治昭子爾幸モ一子子治作八和郎久子雄果薫二則也博男敏臣潔肇一弥夫正大雄男衛吉子彦征敬孝弘健夫
秀一敬達忠真建哲真史十五俊賢晋正修公卜晃嶺敦建泰林公進和喜忠正泰広喜美利世康光憲正輝和修良昌益清
井松村野井野山野井川山田田部塚部達子嵐黒原田藤村村崎村藤野林藤藤藤藤藤藤藤藤藤藤木磨川野中見石石中主田尾島田田口田崎尾野内山取山
寺戸伊中水原広星福星松松丸右山田上上上川北後今駒近進斉斉佐佐佐鈴須関関田高竹田田池土寺中西原樋福藤宮星堀丸梁横
青阿石石池伊今大大小藤小小小小佐里城菅高田塚土敦寺栃宮堂垣西新広藤本吉山山吉若
69回
夫男明史浩郎尚昭良夫夫剛治夫郎元美禰郎司夫次一雄茂郎雄雄孝弘夫郎皓雄昭恒彦夫郎徳司博平裕美子也青雄子子敏敏夫輔郎彦丸男裟也雄允史一夫一子弘三之美志子郎晃也春司雄治子一雄郎樹彦之一誠梁明利二子孝央子光弘康稔功門
哲不忠隆三達快和政征修一隆通成美啓明英孝泰一昭良勝貞幹三達義貞敏武勝良勝睦澄勝輝美奈智美一左利誠士治芳政和正義博亮靖聰孝勝兼誠春啓裕順友興篤敏文敬健邦藤宏靖克精利忠莞請直喜正喜
川藤藤野田見田栗沢橋村崎堀関崎原間巻路合滑田林藤藤藤藤藤藤谷井木木我橋沢崎田場波口崎福見井林林本山野木田井田田
荒伊伊池池石泉宇梅小小大北大大尾尾笠風金河川木久小後近近佐佐摩渋白鈴鈴曽高滝寺城南雄野野早伏藤三三松丸水村山吉吉薄池池行今榎小小加鳳加金北合小小小桜下鈴関関高竹寺中野二丹長橋橋福福星本松丸矢渡渡山山横
吉田六左エ
67回
部井井上泉野滝川野崎村田村
阿石石井今大大小小小岡奥岸北君桑小佐佐塩白菅瀬関高高高田田田滝田
瑞一信隆正ト勝紀興紘英哲晋八邦俊重一昭信三直
智俊糟郎作治通宏エ義功男治一夫治子夫一満節登三一亨夫郎史元収
正鎌俊蓉善正秀克瑞弘正利清大健昌光和和紀泰修忠弘健政幹安
代井原泉藤口井脇谷名川川山田藤原子田藤原泉林林林藤藤藤藤井井川賀
網石石和伊猪今岩魚蝦小小小小岡加笠金川近桑小小小小斉斉斉斉斉斉酒佐志
耿二夫子允孝昭迪茜彦技良一邦策仙三人男雄代昭嘉平正道統輔行子恵雄
暁照威宣武之峰誠彦生明一壽夫三文人彰夫隆健信三勲郎義穂昭蔵男至臣敬子之恒寛郎實樹司真明之亮一夫男紀明之一亮治開弘朗也健作彦司也恰介男之義夫健元雄三郎一子博一子臣卓夫啓吉梓一二郎寛勲治悼郎雄夫三一介夫典一子仁吉純窓三夫重子夫夫修郎夫郎之介務司真達樹彦子郎男行介治吾雄子敏孝
龍常龍雄熙昭義康福真隆善淑通昌一和瑞恒留正貞富勝昌忠秀正亮隆昌康徳由美孝肅健敬哲琢良勝武誠幸賢直徳政照良貫誠恭健寿国晴洋義義洋舜滋正邦陽生圭陸宏栄京宥龍愛成一輝敏悦隆俊廣敬順
秦橋橋中田川沼野山本川川口井崎澤間尾山川山部田本村辺林
62回
食木柳木崎崎見田黒田田川瀬田渕原山藤黒高津沼藤家成村池野林藤藤野藤藤藤藤藤井川野木木我子中中村村村橋沢川井山山川井野村村山野川川多田田山国浦崎川本沢木山口城川崎根辺辺
高高高田土富長西庭野長長浜藤藤古本松丸宮村谷矢山横渡若
安青青荒石石池石石石石石岩岩岩岩上内遠小大貝貝加角神木小河小近近斉佐佐佐佐佐坂笹重鈴鈴曽田田田田田田田田田田田田高滝立寺遠外中水中中中中西長長原原原藤福藤星帆堀本町丸桝三三三皆湊宮宮村村守結山山山渡渡
阿赤赤五十池池伊和石伊江大小
63回
世介成篤吾夫満男彰士一一豊郎郎司之一男志也樹男実真吉雄男忍司登彰直亨二郎明郎功雄史城夫作教雄之樹夫男進三也一郎夫夫弘一夫隆治洗弘彦満夫雄夫夫三博三六郎博夫昇浩彦雄偉直一男夫宏男二修雄子夫憲夫淳一介一見助三男輔和信一康章彦雄昇男雄記夫一弘夫雄明繁武夫明栄一明三理也夫
英一一陽友初
60回
部黒嵐浦川川山井杉山田村田合斐田岡山田谷谷倉倉田出林林林林山木藤木井水山城野橋橋橋橋橋野中中村部木川田山岡田橋村山波脇村本川川武田田瀬田野野間井野川崎崎崎本田田辺辺辺
宮田吉川川辺辺辺忠邦健厚紀文一精雅真英嘉達夏佐智常鉄不正昭庄智進守卓丈悌一英信正貞明昌民浩和幸文正浩和悦信正保行信篤秀正達大鈔昭一幸哲和芳良達淳栄晃正
十十十

平成五年度青山同窓会会費納入者名簿

（4月より12月まで納入済みのもの）

未納の方は3月までに納入くださるようにお願い致します。

1口1,000円できるだけ2口以上でお願い致します。

郵便振替口座　新潟5－4455　青山同窓会

●平成6年5月より 00650-7-4455 青山同窓会に変わります。

第四銀行学校町支店口座 0275210　青山同窓会

18回
玉木 繁治

21回
吉田 武四郎

26回
木村 耐七

27回
内山 淳一

28回
大谷 鐘吾
小原 武一郎
塚田 武雄
野村 治三郎
広橋 敏
松浦 茂路
村田 汎愛

29回
太田 久雄
北村 太市
松井 達夫
武藤 経世

30回
遠藤 種雄
鷲田 徳雄

31回
浅海 勝治
田村 一也
名倉 清
松井 道夫
村田 忠雄
守口 東平
山下 大蔵
渡辺 政吉

32回
大塚 為吉
木村 義也
北村 博繁
桑原 靖雄
小林 力三
斉藤 凱雄
霜鳥 重策
菅原 憲雄
曽我 英彦
竹林 松二
庭山 政治
中原 彦之烝
丸山 岩次郎

33回
磯野 英男
植木 実就
川上 英三
清水 弥寿雄
春木 五郎
平岩 恒夫
堀川 秀一
松浦 錦一
山添 三郎
山田 又一
若林 清

34回
石黒 一郎
小野塚 忠義
神田 坤六
柏森 忠四郎
清野 力
北村 秀以
木村 元
後藤 寿衛
斉藤 申吾
佐久間 信吉
坂井 義雄
佐野 清
相馬 貞蔵
竹内 仁幸
武内 量専
田辺 隆一
堀 吉蔵
堀 保利
真野 孝亮
山本 剛男
渡辺 芳雄

35回
五十嵐 久四郎
飯村 豊雄
今成 一郎
内田 善衛
尾崎 三夫
篭島 秀雄
熊倉 雄三
小出 藤吉
近藤 百之
斉藤 昌治
沢山 巖
相馬 雄三
武田 慎三郎
寺田 利男
丹路 信男
古川 喜久次
丸山 求蔵
山名 栄一

36回
阿部 市蔵
石橋 健雄
今井 二雄
植木 市松
植木 正平
小川 種太郎
加賀田 二四男
風間 忠雄
金井 宣夫
河辺 昌伍
久保 文苗
倉田 享
斉藤 吉之助
斉藤 英四郎
関 昇
関根 達夫
関根 勤
高木 利夫
田中 武
田中 清太郎
寺井 元一
富所 太三郎
中山 義男
樋口 均
福田 謙也
前田 節雄
宮島 義代吉

37回
阿部 広雄
浅井 宏
猪坂 三郎
小野里 寿夫
会 純道
黒川 武三郎
小松 正二
鈴木 正二
田中 郁郎
田中 俊二
田中 正二
田巻 恒彦
高橋 睦治
富永 良一
野末 武夫
馬場 幸一郎
原 林
三間 裕
武藤 惇

38回
石黒 得一
石田 弘正
池田 正昭
太田 武
大沼 正一
桶谷 勇策
加藤 秀英
加藤 禄郎
勝田 虎夫
木村 基
清野 準一郎
小林 三郎
後藤 林八
近藤 円
笹川 仁一郎
沢野 十蔵
重野 伃
関 秀雄
関屋 俊彦
高橋 隆甫
田中 松一
竹石 三男
高野 政夫
田村 勇作
高橋 朋幸
中村 実
南場 闊
藤宮 武
舟崎 徹
細野 哲雄
橘本 太助
藤田 義一郎
丸山 岩三
真柄 一衛
南 勇
山口 五郎久長
吉田 昭平
吉田 正男
渡辺 義平

39回
阿部 助哉
石高 信司
市嶋 智三郎
猪 初男
上原 虎雄
大野 賢二
小林 清市郎
川崎 孝治
鎌田 輝虎
北川 立夫
小林 芳輔
佐藤 平八
佐藤 裕雄
志賀 鍗二郎
下 雅夫
鈴木 正男
杉崎 晋
関根 進
田中 正一
高橋 栄一
立間 実
中村 健
福山 健
古沢 長衛
桝山 延次
皆川 登良夫
皆川 竹次郎
宮村 定男
村田 篤
渡辺 俊男
鷲沢 五郎

40回
会田 俊雄
浅妻 直未
阿部 富衛
井村 繁樹
小柳 毅
熊倉 武夫
小田 浩吉
小山 賢市
後藤 功
斉藤 久
白勢 敬二
渋川 七夫
田宮 弥一郎
高田 信川
高橋 俊成
竹中 忠司
竹林 正五郎
池主 憲
土屋 均
南学 正時
中村 年夫
長谷川 卓三
早川 悦司
日之浦 聖
古山 淳三
真柄 慎平
松田 一郎
山田 金次郎
湯浅 市作
吉川 典
渡辺 信雄
吉岡 武憲

41回
今川 正男
今成 隼次
上原 喜八郎
金子 清
神田 明
洪野 玄彰
坂井 寿夫
佐藤 家之助
志賀 潔
清水 正一
高橋 正道
高橋 正蔵
高野 秀夫
高田 弥彦
富沢 五郎
中村 昌利
南部 弥之助
丹羽 正樹
野末 正二
布施 栄信
星名 孝平
本間 敏雄
宮島 磊次
山岸 小五郎
山谷 修一
山田 弘
八木 勝
柳本 實
渡辺 卓三
渡辺 忠雄
渡辺 博

42回
相沢 康平
阿部 辰一
有田 賢一
石井 嵩
石山 武
今井 包和
今泉 景喜
石本 洪規
薄田 開元
小野 隆一
大野 總一郎
大谷 友之助
大谷 修三
岡 喜一
岡 富之助
片山 彦三
加藤 悦平
金沢 裕
神林 年
菊地 駒勲
北村 惣一郎
小泉 俊平
佐藤 勇
佐藤 政治
斉藤 萬亀男
塩谷 正雄
篠田 富衛
鋤柄 実
高橋 二郎
高橋 吉郎
高橋 宏
高山 雄次郎
田中 正吾
塚野 俊二
堤 清作
東城 真佐男
鳥羽 正隆
豊岡 憲夫
西山 秀夫
灰野 秀康
廣川 治
広沢 斉
樋口 正
星野 祐
前田 隆英
丸山 平次
三国 文治郎
森山 敏雄

43回
市橋 敏雄
今井 亮
小野寺 稔
小沢 省三
大内 吉郎平
加賀田 達二
加藤 行輝
鍵冨 馨
菊池 芳郎
菊地 快袖
草野 磐
黒岩 広雄
近藤 種臣
笹川 謙録
佐藤 繁
佐藤 彰平
佐藤 和吉
佐藤 貞之助
佐野 真一
渋木 貞男
関能 克義
竹石 真久
竹林 松雄
田中 一郎
高木 喜三
田中 功
田中 憲司
滝沢 義雄
徳重 茂
野沢 正男
早川 陽
早船 春洋
浜田 昌栄
本田 礼一
丸山 直威
皆川 正
山際 正雄
渡部 一郎

44回
相馬 百合彦
伊藤 礼作
池田 元之助
岩谷 烝一
今井 仁
遠藤 健一
小原 康作
垣原 高志
金子 一夫
加藤 斗南
北沢 裕
小池 寿哉
小泉 大三
小林 広安
小林 瑋吾
斉藤 伸雄
斉藤 三郎
佐々木 勧麓
佐藤 敬雄
高野 伸三
田辺 啓三
寺田 由永
中野 彪
中村 健
七尾 健一
西 観司
錦織 登美夫
西山 尚三
早川 広吉
広川 勇一郎
平野 昇平
平原 芳郎
本田 一郎
峯木 鉄夫
村山 敏夫
山下 稔香
山根 俊英
山田 英政
山崎 関二

45回
青山 基三
石崎 政治
石原 八十秋
市嶋 正男
五十嵐 与四郎
稲葉 敏郎
稲村 稲次郎
扇 嘉家
小野寺 豊
沖野 準
大滝 俊夫
鹿取 邦男
柏崎 賢太郎
金井 弥寿郎
金澤 武
唐沢 治一郎
川村 明義
児玉 邦彦
小島 平弥
小林 朝夫
小林 直弥
酒井 敏行
坂爪 力
笹川 隆三
捧 孝平
志村 俊夫
白倉 丘
渋谷 芳二
品田 弘
鈴木 茂男
鈴木 俊夫
関崎 睦男
田村 浩
滝沢 久衛
高橋 光雄
高橋 敏雄
高山 照三
寺山 恒男
中山 仁
中村 国夫
橋本 良材
長谷川 渙
長谷川 健次郎
治 雅樹
広瀬 敏
藤島 俊
本間 泰輔
丸山 泰雄
三宮 慶雄
山際 昌介
綿井 兵衛
渡辺 節夫

46回
稲野 藤三郎
上杉 栄一
江口 松弘
大越 健治郎
大津 任
小熊 幸男
加藤 国男
鍵冨 春雄
片桐 英一
川上 慎三
君 正男
工藤 常麿
熊谷 大輔
栗原 道樹
小林 信夫
小山 崇熙
佐藤 正利
下 勇
菅原 一房
関 慧夫
高島 達夫
高橋 敬吉
高橋 是成
高 芳夫
谷 欽也
塚野 敏雄
土屋 松公
椿 一郎
鶴巻 鉄三
富所 強哉
永井 達吉
中田 紳一郎
新田 公淳
馬場 吉衛
浜田 敏衛
原 泰三
判 恭
樋浦 幸喜
広川 敏郎
広神 良彦
藤巻 貫
堀 松吾
堀川 良平
本田 富雄
湊 栄一
峯木 照夫
横山 隆二
米原 進

47回
朝日 翠
池 重雄
伊藤 元司
内山 吉郎
岡村 茂
倉井 整
劔持 栄一
古俣 辰郎
斉藤 浩一
斉藤 瞳太郎
清水 善夫
巣山 雄二郎
黒川 一男
杉山 弘治
田中 博
田辺 尚二
高橋 邦芳
田村 輝彦
鳥居 俊夫
中川 保
中川 敬康
中野 忠雄
中村 正秀
新津 義雄
西 芳郎
広川 博
藤田 三之助
本間 日吉
丸山 銕治
水野 英男
森田 美寛
山際 政次
山城 彬成
吉田 六郎
渡辺 輝澄

48回
秋元 俊明
阿部 慶二
伊藤 正太郎
天田 孝平
五十嵐 皓太
飯田 大透
飯塚 正雄
大谷 一男
大野 三樹
大橋 明自
小川 清常
樫木 基
川村 一夫
北村 英朗
倉島 亮一
小池 清泰
小出 昭
近藤 源資
佐藤 素一
諏訪 宏
関口 太郎
田中 利男
高木 義雄
高松 節男
土田 喜代也
戸川 次一郎
東条 英治
中村 啓一
内藤 亀六
野崎 健彦
長谷川 俊太郎
林 通
樋口 努
広瀬 五夫
本間 明
真鳴 正
水戸 緑八郎
南 彰
望月 正
八木 素夫
山口 愛正
山口 修
山崎 三吉
吉川 宏英

49回
相沢 春吉
逢坂 猛男
赤松 元敏
井上 正
池田 眞吾
稲泉 武男
内田 文雄
江間 正二郎
小田 登
小黒 義一
尾崎 富衛
乙川 順三
梶山 勝清
梶原 計佐
片桐 勝司
亀山 宏平
角屋 元
神林 光雄
木村 竜一
工藤 弘安
倉田 資孝
見定 民雄
小林 幸男
小島 忱
斉藤 敬治
駒林 行弘
斉藤 俊八郎
佐藤 博
佐藤 武雄
塩田 量
清水 直彦
志 勇
渋谷 直城
白川 保
仁保 武人
関井 康雄
高橋 幸一
高島 秀雄
田中 久盛
高山 昇一
田沢 和内
竹山 行雄
滝沢 信義
池主 淳
土谷 幸治
長沼 甲子男
中村 廣徳
中村 五郎
永松 一久
南木 三代世
庭山 清八郎
原 猛
林 丈夫
弘中 博元
藤田 芳郎
舟崎 裕二郎
細野 耕爾
本田 正胤
丸田 貞介
水本 弥
柳生 茂
山口 正十三
山崎 武
渡辺 純
渡部 松生

50回
池田 成徳
池田 信彦
石田 卓也
石崎 浩
五十嵐 喜八郎
五十嵐 清
一柳 夫
犬井 俊榮
今井 政弘
今沢 勝十郎
岩瀬 信夫
岩原 勇雄
上村 勉
枝石 道平
大川 正信
大田 正彦
岡田 務
岡津 一郎
大坂 匡
勝見 卓男
上村 秀也
神田 光司
苅部 正弥
木下 洋太郎
黒川 広左右
木宮 恒男
熊田 博
小木 勝弥
小林 淳一郎
佐藤 惇郎
坂上 伊守計
坂口 剛一
渋谷 六郎
白井 忠城
瀬谷 武
大黒 悦郎
高橋 善誠
高橋 弥
高橋 忠清
竹之内 行
竹田 達修
寺田 忠雄
田辺 秀夫
鶴田 尚夫
時田 雄
中村 勇寛
中村 一司
中村 亮郎
西本 晴宏
根本 明信
橋川 洋忠
長谷川 一
長谷川 健正
原田 陽作
馬場 敏三
平石 賢雄
廣川 一
布施 吉治尚
古川 栄郎
藤井 義明
堀 信聴
本間 良
前柄 三誠
水川 生
宮野 哲夫
宮島 春懋
諸崎 謙郎
武橋 一新
村藤 久一

51回
山岸 芳郎
山田 璋治
渡辺 欣次
吉沢 績
吉村 武郎
青木 博夫
朝倉 蓮城
浅見 信夫
荒井 奥弘
池田 正司
五十嵐 健之輔
池田 誠吾
市村 堯
稲川 豊
今泉 笑顔
岩城 剛一
歌川 正博
内山 友和
永木 昭治
大関 雄策
小黒 昭六郎
大川 宏
大滝 映夫
岡村 安雄
岡本 耕治
落合 毅
鹿島 幸治
小柳 謙三
笠井 謙
笠原 仰二
加藤 昭一
勝山 新爾
河内 研太郎
川瀬 熙
河路 渡
北村 茂
木下 進
桑名 昭治
劔持 栄司
小林 欣一
小林 孝二
小林 慎治
近宮 富郎
斉藤 俊之二
坂野上 正啓
笹川 重男
斉藤 素一
斉藤 了
島田 晋
嶋岡 篤強
白石 誠郎
鈴木 康二
鈴切 恵雄
巣山 人
菅野 義浩
高橋 政和
竹島 泰郎
田中 敏雄
田中 秀朗
田中 繁夫
千葉 清太
坪井 泰秀
中川 忠一吉
浜田 武雄
藤井 郎
藤島 繁雄
藤田 三寛
細貝 量男
真壁 幹男
真野 一次
丸山 芳男
三村 安郎
宮島 勇三郎
村上 和仁
村山 恒郎
百川 精一雄
八木野 義夫
山田 輝郎
横木 雄
和貝 雄

52回
青山 秀
阿部 秋由
阿部 次夫
安東 道夫
石崎 昭一
稲村 秀元
岡崎 昭児
小熊 鐵也
小黒 和隆
小沢 興栄
奥山 実
乙川 良英
折戸 睦男
押木 博太郎
大塚 敬造
加藤 尚八
川合 賢吉
菊地 定一郎
北嶋 益二
北村 三男
木原 陽
斉藤 兌
斉藤 泰五郎
斉藤 志稔
坂井 和夫
坂井 保也
佐藤 陽二
佐藤 昭三
佐藤 隆三
澤田 秀夫
椎谷 義郎
塩田 正男
白井 欣弥
真保 堅雄
鈴木 禎二
関口 昭
田中 次郎
田中 序雄
武笠 長助
高沢 昭二
高橋 常夫
田中 良雄
津野 昭治
筑波 正平
冨取 竜二
長尾 徳夫
中川 明
永井 義郎
永井 勝郎
長沢 淳一
成田 昭二
丹羽 昭一

53回
阿部 靖朗
阿部 定一
浅海 典
荒木 典雄
飯野 俊栄
石黒 達也
石原 孝
一柳 邦男
板津 堯
稲月 作之助
今立 元
石沢 嘉彦
上杉 純一
大山 昭三
大倉 憲吾
大谷 邦夫
片桐 憲吾
河合 忠衛
川口 信夫
神村 光男
久林 輝弘
栗代 和夫
小原 昭
小原 稔
小島 久雄
小林 辰雄
小林 茂孝
近林 武
佐藤 泰男
佐藤 昭太郎
坂井 良策
桜井 武夫
笹川 智
篠原 惣之助
白井 徳義
白井 長一
塩谷 勇
鈴木 道夫
関 芳男
関根 隆造
田崎 弘二郎
高木 光雄
高橋 国夫
高橋 秀夫
高松 勝彦
玉木 英一
丹後 和丸
長野 将二郎
津川 源太郎
坪場 道雄
長島 努
中山 雅
中山 一雄
西口 常夫
野口 政雄
野瀬 敏作
橋本 俊典
広川 国次
広沢 寛哉
平木 勇
藤沢 功
藤田 利弘
福田 辰雄
本原 英治
前間 秀夫
正川 昭平
間木 敏雄
松瀬 一
桝本 左右宏
増潟 伸司
密山 昭一
山本 隆夫
若田 勝司
渡沢 又一
渡辺 典
若渡 義隆

54・55回
阿尻 威吾
新井 勝龍
石橋 丈夫
今湊 良敬
伊藤 健二郎
芋川 敏彦
石本 林三
今井 兼智
梅沢 修
梅沢 竹太郎
大島 壮一
大塚 久一雄
片岡 啓郎
片桐 武昭
金子 隆弘
倉茂 周明
児玉 保
小林 一彦
小松 一義
斉山 和夫
斉藤 健一
佐藤 雅彦
笹谷 正紀
渋木 哲也
庄司 登
真谷 元一
進藤 誠慧
鈴木 仁一
砂山 俊雄
清野 半吉
早福 卓
高井 真
高橋 弘
高橋 信次
津野 民男
土田 達禅
常木 剛
寺崎 哲男
富所 寿男
等々力 和人
長谷川 直彦
長谷川 政雄
原田 保二
平山 顕修
保倉 春
星井 正雄
前田 利雄
松浦 徳芳
松本 明敏
宮尾 益男
三村 一
武藤 輝一
村山 義夫
山際 淳夫
山崎 賢二
山田 甚平
山田 源行
吉澤 有介
米山 俊彦
鷲頭 直明
和田 迪雄

56・57回
阿部 弘昭
網干 道雄
赤坂 長弥
朝比奈 和三
荒川 昭寿
有磯 邦男
安藤 吉平
伊藤 泰夫
井上 幸衛
池田 兆策
石田 恒良
石崎 和雄
市川 千尋
市川 久純
今城 信敬
芋川 敏彦
岩倉 徹
岩瀬 玲二
上田 宏
浦野 説衛
遠藤 芳幸
大川 進
大竹 多計二郎
大野 利夫
小熊 恒徳
逢坂 七郎
大湊 一郎
岡 淳三
折戸 善衛
織田 瑞谷
大谷 勝巳
岡田 弘夫
小田 一彦
加藤 吉策
笠原 健一郎
篭島 一衛
加藤 勝則
川崎 尚一
川口 政行
川田 幸生
木村 直平
北村 晴四郎
清川 坦
久保田 剛敏
栗林 昭
小嶋 芳郎
小嶋 秩夫
小林 隆太郎
小松 重男
近藤 源也
佐藤 晃哉
佐藤 守悦
斉藤 恒
清水 隆
鈴木 寧
鈴木 正身
田中 陽一
田中 孝
建部 恒彦
高塚 勝吉
高見 久義
中川 彰
中村 彰
中由 正男
南雲 照三
中山 昭一
西 義明
庭山 六郎
粕川 正之
野沢 英雄
畠山 茂
原 英二
判 昭彦
広川 宏
福田 克彦
星野 健二
堀 藤四郎
丸山 昭三郎
松井 昭五
三崎 正一
皆川 正男
村川 順三
目黒 剛
山中 紀行
山田 陸男
山崎 洪二
山本 幸正
横山 信弘
渡辺 康司
渡部 義一
渡辺 友也

58回
青柳 広士
阿部 隆
五十嵐 治
池田 成義
植村 未哉
歌代 荘平
遠藤 整治
遠藤 照雄
大山 芳郎
岡田 耕衛
小熊 勇司
加藤 高弘
加藤 七尾